中世艶書文例集の成立

――『堀河院艶書合』から『詞花懸露集』へ――

小川剛生

要旨　艶書文例集とは、さまざまな恋の状況における懸想文を掲げ筆法を解説した書札礼の故実書であるが、その包摂する範囲は広きに及んで、艶書文学というべきジャンルを形成している。たとえば『堀河院艶書合』も艶書や艶書歌の手引きとして読まれたし、室町物語や仮名草子には登場人物の艶書のやりとりによって筋が展開するものがある。

東山御文庫に蔵される『思露』は中世に成立した艶書文例集である。やはり艶書の「書様」と「文例」からなり、艶書をしるし相手に贈る際の、さまざまな知識を解説した書物であるが、その成立・作者については、これまではっきりしたことは知られていなかった。

本稿において、本書は南北朝末期、二条良基が著したもので、公武の間で広く読まれていたことを述べた。さらにその内容は文学的にも見るべきものがあり、当時の『源氏物語』をはじめ王朝物語への理解を示し、また仮名文をいかに書くべきかを初めて具体的に説いた書物として注目に値することを指摘した。

続いて、代表的な艶書文例集として知られる『詞花懸露集』はこの『思露』を後人が改編した本であること、また『堀河院艶書合』の伝本の一部にも『思露』を吸収したものがあることなどを述べ、中世の艶書文学作品に『思露』が与えた影響が甚だ大きいことを明らかにした。附録として東山御文庫蔵本の全文を翻刻した。

一、はじめに

『太平記』巻第二十一に、権勢に誇る高師直は、噂に聞く塩冶判官高貞の室への恋慕の情やみがたく自らの思いをしたためる。わざわざ能書の兼好法師に代筆させての艶書は「紅葉重ねの薄様の、取る手も薫るばかりなるに、人知れぬ心の奥をくれぐれと引き返し引き返し黒み過ぎてぞ遣はしける」[1]という代物で、空しく庭にうち捨てられてしまう。かわりに立った歌人の薬師寺公義が「詞をばいかに書くとも、思ふ程の心の色を知らせがたければとて、歌ばかり」にすると、さすがに女も返歌だけはよこした。兼好は師直の怒りを買い、公義は大いに面目を施した、とある。

塩冶判官の讒死を語る章段のうち特に名高いこの挿話は、なんらかの実話に基づくともされているが、もとより艶書のやりとりなどは創作にかかるものであろう。ただ、嘲笑される師直の艶書の有様には『太平記』ならではの周到な工夫を読み取ることができる。

中世の武家を対象とした書札礼の故実書では、一見意外なことであるが、艶書について解説するものが目立つ。たとえば南北朝期の『今川了俊書札礼』[2]は、一章を設け艶書の心得を説く。そこには「一句に歌ばかりにあらはしたるは中々よきなり。詞ばかりのふみは如此(法カ)大事なるべく候」、あるいは「文のにほひはわざとがましく、ことごとしくかうばしきはわろし。をのづからしみふかきやうにかほるべき也」とある。また室町後期成立と目されている艶書文例集『詞花懸露集』は、やはり具体的に艶書の筆法を解説して「文のかきやうは尋常の散らし書きなるべし、墨つきほのかなるも返々おもしろし」「又ことのはのおほき、返々あさましきつたなき事にて侍る也。たゞ一こと葉かくべき也」などと教えている。

こうした証言を踏まえる時、師直の艶書は「紅葉重ねの薄様」はよいとしても、触れた手までが匂うほど香を焚きしめたのは明らかに行き過ぎで、しかも相手に初めて思いを伝える時は歌だけで足りるのに文を「引き返し引き返し黒み過ぎて」（散らし書きにするので長い文章だと紙面が黒く見える訳である）記したのは論外である。要はしてはいけないことを全てしたのである。

この逸話は当時の艶書がどのように製作されて受け取られるものであったか—艶書が既に様式化された形で人々の間に交換され、その確立した作法を人々が知識として持っていたことを前提とする。了俊が詞だけの艶書はかえって難しいとするように、文で失敗した兼好と歌で成功した公義との明暗もここに収斂される。やがて艶書の書き方を教える書物、具体的に文例を示すとともに料紙・書式・包み方などの書様を説く艶書文例集が成立することは当然といえよう。先に触れた『詞花懸露集』がその鼻祖とされ、「書様」と「文例」からなる構成が後世の文例集に与えた影響も大きいことでしばしば注目されている。(3)

艶書文例集は故実書の範疇に属し江戸時代の女訓書の源流ともみなされるが、さまざまな恋のシチュエーションにおける艶書を創作して連ねることで、よみものとしても楽しまれたに違いない。実際に艶書に対する関心から生まれた書物、あるいは周縁にあってそれを掻き立てた書物を多く挙げることができる。艶書の文面をそのまま掲げてストーリーが展開する『はにふの物語』『玉虫のさうし』などの室町物語が代表的なものであり、仮名草子『薄雪物語』を経て西鶴の作品へと連なっていくが、消息中にさまざまな知識を盛って読者の情操教育に資する性格は艶書文例集と殆ど径庭なく、これらを艶書文学と総称することが夙に行われている。

本稿では、そういう艶書文例集の、恐らく最初の作品の編纂が、『詞花懸露集』よりさらに二世紀ほど溯る南北朝期になされていることを述べて、それ以後の艶書文学に与えた影響を明らかにしようと思う。そのことで中世の艶書

のみならず、広く仮名文がいかなる意識の下にしるされていたのかを考察する一助としたい。

二、東山御文庫蔵『思露』について

艶書文例集として最も古いと思われるのが『思露』という作品である。本書は東山御文庫に後花園院筆とされる古写本と、その転写本を蔵するほかに伝来を聞かない。まず本書の内容・作者・成立について詳しく述べていくことにする。なお近年刊行された『皇室の至宝　東山御文庫御物3』（毎日新聞社　平11・12）に書影二葉が掲載されている（相馬万里子氏解題執筆）。いまのところ本書に言及した唯一の文献である。

まずは書誌を略記する（79頁図版参照）。勅封一一五―九。袋綴一冊。〔室町中期〕写。表紙は二四・三×一六・四cm、原装か、素紙に野の草木を描く。外題は表紙左肩に題簽を貼り、「思露」と墨書。内題は「おとこ女のふみのかきやう」。墨付一八丁、遊紙前後一枚。裏見返しには「後小松院御宸翰也／（草名）／墨付拾八枚」との書入があり、後小松院筆との伝承もあった。毎半葉一〇行、まま本文と同筆で引歌注記あり（上下句二行書き）。

ついで各段に仮に標題を付け、内容を簡単に紹介する（附録として全文を翻刻した。本稿の引用は原文に適宜句読点・濁点・送り仮名等を施し、割注は〈　〉に入れて示した）。

大別すれば、第一段から第七段および第十七段の、艶書の書様、即ち表現技巧のほか艶書の重要な要素であった、筆蹟・料紙・包み方・消息に付ける折り枝などの意匠故実の解説と、第八段以降の、さまざまな恋のシチュエーションにおける艶書文例から成っている。

書様のなかでは第五段に核心をなす記述がある。必ずしも論旨は整理されている訳ではないが、古歌に学びその詞

『思露』内容一覧

(1)〔女御入内の後朝文の包み方故実〕
(2)〔艶書の料紙〕
(3)〔艶書の意匠と折枝〕
(4)〔男の艶書は匿名を保つべきこと〕
(5)〔艶書の書様と源氏物語、歌学の知識〕
(6)〔艶書の筆蹟〕
(7)〔艶書に用いる物語の詞〕
(8) 文例(1)「聞くばかりにていまだ見ざる人のもとへ」mf
(9) 文例(2)「ひとめよそながら見たる人のもとへ」mf
(10) 文例(3)「女の返しをしたるに重ねてやる文」m
(11) 文例(4)「初めて逢ふ後朝の文」mf
(12) 文例(5)「たび〳〵逢ふ人のもとへ」m
(13) 文例(6)「逢ふて後忍びて久しく逢はざる人のもとへ」m
(14) 文例(7)「男のたのみなきに女のやる文」f
(15) 文例(8)「心ならず遠国へなど行きたる人につかはす文」m
(16) 文例(9)「及ばぬ枝に心をかけたる文」m
(17) 文を付くべき枝にそふ詞
(18)〔跋文〕
(19) 文例(10)（散らし書きの文と歌）mfmf
(20)〔本奥書と上臈の消息〕
(21) 文例(11)（梅の枝に付けた文）mf

※m＝男の消息　f＝女の消息（以下同じ）

を借りて構成せよ、そのことで文章をなだらかに聞きよくするべきで、そういう言語感覚を磨くには『源氏物語』が最適であると教え、艶書歌の風体についても説く。艶書歌を通常の恋歌とはやや異なる詠み方をするものととらえているのである。

文例は前に説いた教えを実地に示すためのもので、古歌や『源氏物語』『狭衣物語』の詞に拠りつつ創作されている。第八段の文例(1)から第十四段の文例(7)までは、和歌の題でいえば「未見恋」より「恨恋」までに相当し、恋の始まりから終わりまでの経過に沿って文例が並べられている。なお第十二・十三段が女の返事を載せないのは、こういう場合返事をすべきではないからである。

第十八段は跋文に相当し、本書の成立事情が述べられている。ある東男の「男女のふみはいかにぞ」という問に対して、こういうことはきちんと定めたものはないが、在原業平・藤原実方・藤原道信ら古人の書き置いたところを抜き書きした、というのである。もと

より書様も文例も作者の筆にかかるもので、王朝の風流才子の振る舞いに学んだというポーズに過ぎず、「東男」も実体がある訳ではない。ただ、ここでわざわざ「むかし堀川の御門艶書合など侍りし」と挙げていることから、作者は規範として『堀河院艶書合』を意識していたことが分かる。

この跋文の後にも文例がある。第十九段は二組四通で、初めて逢った後朝文と正妻の嫉妬を思いやる女の返事、続いて逢えないことを弁解する男の文と女の返事とがあり、この段のうちで完結しているが、散らし書きの実例として出された如くである。第二十一段も男女一対の文であるが、第十七段で説かれた折り枝の消息の実例として掲げられたものである。ともに他の艶書文例と異質ではなく、敢えて後人の増補とするには及ばない。ただ、梅以外にも折り枝の例は多く、他の草木の例もあってしかるべきである。そのほか、第五段はあまりに長大であり、第七段は艶書に用いる物語の詞について説きながら、後半では女房の局の高欄や猫の頸綱・犬の頸玉にも文を結びつけると述べ、前半との続きが悪く不審である。相馬氏が「全体の構成はやや分かりにくい」と述べられるように、東山御文庫蔵本の形態からは本書が未定稿であった可能性もまた窺うことができる。

続いて『思露』の成立事情と作者について明らかにする。

書名は外題に基づく。相馬氏が指摘されているように「おもいのつゆ」と読むべきであろう。これは後人が勝手に付けたものではないと考える。

もとより「思露」という漢語も存在するが、鎌倉期以降の和歌・連歌に「おもひのつゆ」という詞を詠み込んだ例が散見する。[4] これらは『新古今集』仮名序の一節、

かかりければ、代々の御門も是を捨て給はず、撰びおかれたる集ども、家々のもてあそびものとして、詞の花のこれる木のもともかたく、思ひの露もれたる草隠れもあるべからず。

を直接的な源泉とするようである。なお『風雅集』仮名序もこれを踏まえて「おのおの思ひの露ひかりをみがきて玉をつらね、詞の花にほひをそへて錦をおる」とある。人を思慕する気持ちから流す涙、そこから転じ感情の発露を意味し、まずこの書物に相応しい命名といえる。

それでは作者の検討に移りたい。第二十段に、

二条前殿下の御自筆なり、此の物語は大殿抄出せらる秘書にして、天下の口談なり、上臈御局に書き進せらる、御寵愛によりてと云々。

という某人の本奥書（原漢文）、および、

此の物がたり返〳〵御ありがたく候。ことさら秘蔵し候はんずる、よく申させ給ひ候べく候。さりながらかやうの艶書などは見および候はゞ、かうばしくて候。よく申され候はゞ、御うれしく候べく候。御かさのおりふし、なを〳〵御こゝろざしのほども申しつくしがたくて候。

至徳二年六月廿二日

という消息・年記が載せられている。なお、本書を「物語」と称していることに注意したい。

消息には署名もないが、その内容は本書を贈られたことに対する謝意を伝えるものなので、本奥書に現れる「上臈御局」の返事と推定される。相馬氏の言われるように、至徳二年（一三八五）六月二十二日という年記を本奥書と消息にかけて解釈すれば、筆者である「二条前殿下」は前関白二条師嗣、「大殿」と呼ばれるのはその父二条良基に比定されよう。「抄出せらる秘書」とあるが、こういう場合の抄出は執筆と同義とみなしてよく、作者は良基と考えられる。「天下口談」とは世間で評判になっている位の意であろう。

二条良基は和文に長じ、『源氏物語』以下の古典にも通暁していたから、作者として誠に相応しい条件を備えてお

り、「思ひの露」という語を良基が好んでいたという傍証もあるが、[5]それでも断定するにはいささか不安が遺ると言わなければならない。とりわけ奥書の「上臈御局」とは誰か、また最後の「御寵愛」とは単に師嗣のそれとしてよいのか、成立問題と絡んで解釈が難しい。

しかし、幸いなことには、『今川了俊書札礼』のうちに『思露』の作者についての明確な証言が得られる。[6]

二条殿あそばしたる物に思露とて候、けさうぶみの詞くだりあまりたをやか過たりしことのつまに、古歌の詞をとりて、書きなぞらへたるがよき也、すべてたゞかやうの事ばけらはしからず、そゞろかず、さるからふつゝかならぬやうに書きて、心の底をあらはすとせちに侍るなり。

この記述は『思露』の第五段・第六段によく照応しており、東山御文庫蔵本と同一の内容を持つ『思露』を踏まえて書かれたものと考えてよい。それを「二条殿あそばしたる物」と述べている。了俊と良基との長年の交友からも、これは師嗣ではなく良基とすべきである。『今川了俊書札礼』は了俊の九州探題在任時に在地の武士に与えたもので、その成立時期は永徳三年（一三八三）から応永二年（一三九五）の間とされるので、これを勘案すれば、至徳二年六月二十二日という年記は一応本書の成立を示すと受け取ってよいのであろう。

「上臈御局」は、本書が至徳年間の成立ということになれば、後円融院の後宮に仕えた三条厳子（のちの通陽門院）とすべきであろう。[7]本書にはたしかに後世の女訓書の源流となるような記述があり、厳子に宛てたと見ても特に齟齬を来さないが、ただ「御寵愛」の主語は恐らくは後円融でも師嗣でもなく、足利義満であろうと推測される。厳子は当時義満の愛人であったと考えられるからである。そうすると、本書を公武の人間関係に位置づけ、良基がこのような書物を著した動機を探らなければならないが、それらはすべて続稿に譲る。

ここまでの考察の結果として、本書はたしかに良基の著作であり、「天下の口談」となる程に公武の人々の間で珍重されていたことが確かめられた。至徳二年に良基は六十六歳の高齢であったが、なお歌論書・連歌論書を執筆し人々の指針とする意欲は衰えず、二年後には『近来風躰』で例の著名な同時代歌人評を行うのであった。良基最晩年の文学活動のうちに『思露』を加えることができるのは誠に興趣尽きないものがある。

本書は数少ない中世の仮名文の表現論として評価すべきである。このことについては続稿を用意しているので、ここでは二、三のことに触れるにとどめたい。まずは良基の歌論・連歌論との係わりが深いことに注意しておきたい。第五段では、たとえば、

大方、艶書の書きやうは、たゞやうもなく、しみ〴〵もみ〳〵と、うち聞きの面白く、ざめきたるがよきなり。歌も連歌もこと葉の一つにてもあれ、てにをはのたがへるはいたづら物になる也。ふみかきも一字もたがへば、又さらに〳〵おかしき物になるべし。

とある。「てにをは」の働きを重視するのは、『僻連抄』の「てにをはは大事の物也」、『九州問答』の「テニハノ字ヲ殊ニ沙汰シテ一字ナリトモ心ヲ入ル様ニ可被案也」といった教えと合致して既に良基らしさが窺えるが、艶書を書く時は「しみじみ」とさせ「もみもみ」とする歌語を取り込むべきことを言う。「もみもみ」とは屈折して深みのある巧緻な詠みぶりのことであるが、これらは「所詮連哥ノカ、リト云ハ詞也、当座ニシミ〳〵ト面白ク聞ユルモ只詞也」（『九州問答』）、「為定大納言はきはめてけだかく、ゆる〳〵とたけありて、しかもまたもみ〳〵とあるかたも出来しけるにや」（『近来風躰』）などと照応し、良基が日頃常用していた用語なのである。「ざめきたる」とは、「さざめきたる」と同じで、やはり『筑波問答』に「大方、秀逸の出来ぬれば、そのあたりの二三句はざめきて面白きなり」とあるように、連歌ではその句を出すことで一座の雰囲気が盛り上がるような秀逸のさまである。転じて華やかで人目

を惹く有様であり、これも『近来風躰』に「地歌・文の歌の事、よのつねはさざめきてはたらかしたるを文と心得」という例がある。かように良基は散文にも歌論・連歌論と同じ用語を適用しつつ論を展開しているのである。

もう一つは、書様・文例ともども『源氏物語』をはじめとする王朝物語によく学んでこれを規範としていることであろう。第三段は『源氏物語』の登場人物が仕立てるさまざまな折り枝を取り上げて解説する。たとえば「交野の少将は帋の色をとゝのふるとかきたる」とは、野分巻で夕霧が雲井雁に出した見舞いの手紙の紫色の料紙が、折り枝の刈萱と一見調和していないことをさかしらな女房にそしられる場面である。これは「大方文を同色の木草につくる事さだまれる事なり」（『河海抄』）という常識を前提としているが、[8]『思露』では続けて「これは一説と見えたり。さりながらまたあらぬ色につけたるも、はへあひてよし。源氏にもあらぬ色につけたる事多し」などと述べる。一見何気ない指摘のようであるが、『源氏物語』を深く読み込んだ者ならではの発言であろう。

そして第七段には第五段を受けて要約する形で、

源氏、狭衣、さならぬふるき物語など、面白からむ言葉いかならむも、時によりてとるべき也。ねざめ、はま松やうの物語も人の昔よりもてあそぶものなれば、とりたらむもよかるべし。

とある。『浜松中納言物語』『夜の寝覚』に積極的に言及したのも注意されるが、要するに『源氏物語』の詞（専ら歌の詞であるが、場合によっては草子地までも含むのである）を、時と場合に応じてうまく取り込むことが重要で、それが艶書をしるす最大の勘所なのである。

具体的に『思露』が示した艶書における物語取りの手法を、第十五段の艶書文例によって見ることにしたい。

一、心ならず遠国へなど行きたる人につかはす文

おなじ世とおもひなし候たのみばかりをいのちにて、空ゆく月のかぎりだになく候へば、おもひたえ候ながら、心

のみちはいく海山もさはらぬことにて候物を、いかにおぼしめしだにおはし候ぬ事にて候覧とかひなう候て、わたる舟人かぢをたへて候。風のつてだに候はねば、心ぼそさのみにてあかしくらし候なり。めの末はそなたの空の夕の雲のけしきにてもおぼしめしいで候はゞ、いかにあらぬつらさのなぐさめにて候なまし。たゞかずに□(候)まじき涙にのみかきくれ候て、ふでのたてども□(お)ぼえ候はねば、さながらにて候。

狭衣　かぢをたへいのちもたゆとしらせばや涙の海にしづむふな人

まず「空ゆく月の」は狭衣大将の「めぐりあはん限りだになき別れかな空ゆく月の果てをしらねば」（巻四・一八七）による。「いく海山」も同じく狭衣の「おもひやる心ぞいとどまよはる、海山とだにしらぬ別れに」（巻一・五二）が踏まえられている。この歌を採った『風葉集』の「あすかゐのこと、さらに思ひわすれず、そこのもくづまでたづねまほしうおぼされければ」（恋四・一〇二五）という詞書が端的に示すように、「いく海山」という表現は突然姿を隠した女への男の思いを凝縮した詞なのである。そして「わたる舟人かぢをたへて候」に対しては、既に『狭衣物語』の飛鳥井女君の和歌（巻一・三五）が示されている。

引き歌が『狭衣物語』に集中することからも明らかなように、この文例は女君を失って悲嘆にくれる狭衣になりかわって創作されているのである。

「心ならず遠国へなど行きたる人につかはす文」という標題は、いわば和歌の題に相当しよう。これをストレートに文章に表現するのは、艶書としても、もちろん感心しないやり方であった。中世の歌人は、複雑な歌題に対しては、題字を逐語訳的に表現するのではなく、しばしば「まはして心を詠む」詠法—物語や漢詩の内容を借りることで、題意を婉曲に満たすやり方—をとっているが、それと大変よく似ている。こういう複雑な標題は物語の主人公になりかわってその心境を綴ることで、かえって過不足無く表現されるのである。単に物語の詞を借りよといった皮相な教え

ではない。同様に第十六段の「をよばぬ枝に心をかけたる文」という文例は、同じく女三宮を恋慕する柏木の立場から執筆されているのである。

実際、定家・為家の歌論においてさえ、題詠のテクニックを体系化し指導することは、必ずしも易しいことではなかったといわれる。[9] まして散文でそのことを教えるのは難しいことであろう。艶書文例集において、さまざまな恋のシチュエーション、敢えて複雑な状況における文例を示すようになって来るのは、こういう和歌の題詠の技法の深化とも連動しているはずで、ここでも歌学との関係を視野に入れる必要があろう。

広い階層において、仮名文を書く時には、レトリックを必要とし、具体的な指針が求められた。そういう時代相に対して、『思露』は、主として『源氏物語』をはじめとする王朝物語によって、仮名文を綴ることの目的と方法をはっきりさせ、これを指導しようとした書物ということができるであろう。

三、艶書文例集の成立と改編（1）―『詞花懸露集』

ところで『思露』は先に触れた『詞花懸露集』と深い関わりを有している。結論から先に述べてしまえば、『詞花懸露集』とは『思露』を後人が適宜改編して成立した書物なのである。

『詞花懸露集』は、『堀河院艶書合』および阿仏尼の女子教訓書『庭のをしへ』（『めのとのふみ』）と合綴された形をとる伝本が多い。湯浅佳子氏の研究に基づき、[10]『堀河院艶書合』の本文をA、それに附載された艶書文例をa、『詞花懸露集』の艶書の書様をB、その文例をb、『庭のをしへ』をCとし、主な写刊本の内容構成を記号で示すと次のようになる。結局『詞花懸露集』（Bb）の内容が単行で伝存している本は1の愛知教育大学蔵本のみに過ぎない。

『詞花懸露集』諸本と構成

1、愛知教育大学附属図書館蔵慶安四年写本（一巻一冊）　［Ｂｂ］
2、九州大学細川文庫蔵〔江戸前期〕写本（二巻一冊）　［Ｂｂ＋Ｃ］
3、宮内庁書陵部蔵〔江戸初期〕写本（三巻一冊）　［Ａａ＋Ｂｂ＋Ｃ］
4、三手文庫蔵写本（三巻一冊）　［Ａａ＋Ｂｂ＋Ｃ］
5、寛文元年版本（三巻一冊）　［Ａａ＋Ｂｂ＋Ｃ］
6、元禄十一年版本（三巻一冊）
　ア、みすや又右衛門系本　［Ｂｂ＋Ｃ＋Ａａ］
　イ、宣英堂奈良屋長兵衛系本　［Ａ＋Ｂａｂ＋Ｃ］
7、無刊記版本（三巻一冊、5と同版か）　［Ａａ＋Ｂｂ＋Ｃ］

また6の元禄刊本では『堀河院艶書合』『庭のをしへ』を併せた全巻を『詞花懸露集』と題しているので混乱を招く。三書の関係については、『堀河院艶書合』もまた近世初期に附加されたと考えられている艶書文例を伴っていることから、『詞花懸露集』の成立もこれと関係させる見方もあるが、今井源衛氏は『詞花懸露集』の本文にはさして相違はないものの概して板本より写本がまさり、さらに2の九州大学細川文庫蔵本が最もすぐれているとした上で、「その成立は必ずしも『艶書合』の存在を前提とした附加物と見るを要せず、合綴・附属の形となったのは『庭のをしへ』と同じく後人編纂の問題だけではないか」とされている。[11] 首肯すべき見解であろう。それでは『詞花懸露集』の内容を次頁に一覧する。第一段から第十段は冒頭を引用し標題に替える。

やはり第十段までが書様、第十一段以降が文例となっており、整然とした構成である。ところが『詞花懸露集』の第一段から第十段は、表に示した通り、『思露』の第一段から第七段、および第十八段を改編し再構成したものに過ぎないのである。なお『詞花懸露集』という書名も、「思露」の語、あるいは『新古今集』仮名序の「詞の花のこれる木のもともかたく、思ひの露もれたる草隠れもあるべからず」に基づいて冠したものであろう。

まず68表の上段、『思露』第一段は、女御更衣が入内した後に天皇が遣わす後朝の文について、その包み方や料紙などの故実を述べている。下段の『詞花懸露集』第二段は、割注を割愛するなど『思露』の本文を適宜省略して作ら

『詞花懸露集』内容一覧

(1)「それ艶書の書様は…」　↑思露(2)
(2)「女御更衣の…」　↑思露(1)
(3)「はじめつかたは歌ばかり…」　↑思露(5)
(4)「文のかきやうは…」　↑思露(6)
(5)「昔のかゝる文は…」　↑思露(2)
(6)「よのつねのけしやう文は…」　↑思露(3)
(7)「源氏のはゝきゝの巻…」　↑思露(5)
(8)「昔はその人のつぼねの…」　↑思露(7)
(9)「かやうの忍び文は…」　↑思露(4)
(10)「源氏狭衣のこと葉は…」　↑思露(5・18)
(11) 文例(1)「はじめたる方へは」mf
(12) 文例(2)「又」mf
(13) 文例(3)「たび〳〵文などやりて後なほ心つよきかたへは」m
(14) 文例(4)「あひそめてのちまどをなるかたへは」mf
(15) 文例(5)「あひそめて後の朝には」m
(16) 文例(6)「又」m
(17) 文例(7)「(無題)」m
(18) 文例(8)「(無題)」m
(19) 文例(9)「(無題)」m
(20) 文例(10)「(無題)」m
(21) 文例(11)「(無題)」mf

れたことが瞭然としている。その違いは、傍線部に特徴的であるが、『思露』ではあくまで女御入内の時の特別かつ具体的な故実として説かれていた内容が、『詞花懸露集』では一般化されて語られていることにあろう。

もとより晴儀の後朝文は故実にのっとってしつらえられた。たとえば『長秋記』元永二年（一一一九）十月二十一日条で、源有仁が藤原公実に婿取られて翌朝に文を遣わした時には、「次遣御消息、紅薄様(有下絵)結裏其上、以同薄様結其上宛如薬、於歌者父宮(輔仁親王)詠給、三位殿(源有仁)自筆書給、以家行遣之、良久持御返事帰参、被書紫薄様、裏様如始、右兵衛督(藤原実行)手跡也」とあり、あるいは『玉葉』建久二年（一一九一）六月二十五日条で、藤原良経が藤原能保に婿取られた時には「晩頭遣消息於彼家」として、その文が「書無、薄紅薄様二重、如例結之、引墨、以同薄様一重裏之、如薫物裏之也、同薄様ヲ細ク切テ帖之結頭、片匙結之、不引墨也、只書和歌一首、無他詞」と記される。

『思露』第一段	『詞花懸露集』第二段
一、女御更衣のうるはしき御文、入内のその日、まづかならず文をつかはさるゝなり。その御文のやうは、くすりつゝみとて、美しき薄様〈くれなゐ・むらさきのにほひなどよし〉一かさねにたゞ歌〈いはゐの心なるべし〉一首をかきてこと葉なく、その上をまた重なりたる薄様にてつゝみて、ゑほうにをし折りて薬のやうにかみしもをおし入れて、薬つゝむやうに両方をおしいるゝ也〈柳筥にすゆるなり。たゞしはこは内へとり入れず〉。たゞの人の婿取りにも晴のやうは、昔はかやうなるべし。これは至極の晴の事なれば、よのつねにあるべからず。	一、女御更衣のうるはしき御文、入内のその日、かならず御ふみをつかはさるゝ御事とうけ給はりをよび侍る。その御ふみのやうは、薬つゝみとて、うつくしきうすやう一かさねに哥一首をかきて、ことばはなくて、又かさねたるうすやうにてよほうにをしおりて、薬のやうにかみしものはたを押し入れて、やなひ箱にすゆる也。柳箱をばとりいれざる事なり。たゞ人のむことりなども、至極の晴のときは、かやうに侍るべき事とぞうけ給はりし。

『思露』の説明は、こういう公家日記の中で詮議されてきた後朝文の形態とよく一致し、そのような伝統を踏まえていることが確かめられる。

そして天皇が後朝文を贈ることは、入内という公的な儀式のなかでも極めて重要な場面であり、そこには関白が積極的に係わった。具体的には天皇の後朝文を清書してきちんと包むことが関白の職掌に数えられていた。ゆえに良基は『思露』でこれを摂関家に伝わる故実として開陳したのである。(12) しかし南北朝期を境として中宮・女御の入内は廃絶し、こうした故実も無用のものとなったため、『詞花懸露集』ではもはやごく通俗的な知識として語られることになってしまうのである。

また『思露』第六段は『詞花懸露集』第四段に移行している。これも比較してみる。ここは艶書の筆蹟について語るくだりである。『思露』が、晩年の良基らしい、佶屈として重複が多いながらも、『源氏物語』に登場する女君に対

『思露』第六段	『詞花懸露集』第四段
一、文の書きやうは、よのつねの歌などのやうに散らし書くべし。墨つきほのかなるもよし、又濃墨、薄墨にまぜたるも一のていなり。源氏にもさま〳〵に書かれたるにや。女の手はつよくすくよかならむよりは、ほけ〳〵とありたし。六条御息所は手かきなれども、あまりにつよきやうにやとおぼゆるなり。歌も上手なれども「なほざりごとを神やたゞさむ」などは、はしたなくつべ〳〵しく聞こゆるなり。藤壷・紫の上の歌のさま文書き、ほけ〳〵として物あはれにも情け深ければ、この人〳〵本にてあるべし。	一、文のかきやうは、尋常のちらしがきなるべし。墨つきほのかなるも返々おもしろし。又こきうすきまぜたるも一のすがたなり。六条のみやす所のこと葉はおもしろけれども、「なをざり事を神やたゞさん」など、はしたなくつべ〳〵しくきこゆる也。藤つぼ・むらさきのうへの文かき、うたのやう、ほけ〳〵としてさながらしみ〴〵と物あはれにも又なさけふかくも侍るなり。この人〳〵を本にてあるべし。

する独自の評論を織り交ぜた文章なのに対して、『詞花懸露集』はそれらをかなり削除していて、すっきりとはしているが、『思露』が持っていた生気は失せているように感じられる。

両者の関係をまとめると、長大な章段は随意に分割されてしまっており、また文章も若干の節略と敷衍を行い、割注で示された細かな解説などは省く傾向がある。総じて『詞花懸露集』は良基らしさ・南北朝期らしさを薄めているようである。『思露』第十八段は跋文に相当するが、第五段の一部とともに『詞花懸露集』の第十段を構成している。しかし「あるあづまおとこの、男女のふみはいかにぞと尋ね侍りしかば」や「やがてたくものけぶりとなし給ふべし」などの言は削除され、一書の跋文としての役割は消えてしまっている。

以上のように『詞花懸露集』の艶書書様は『思露』をほぼ完全に吸収しているが、一方、後半の艶書文例の方は、『思露』の文例とは余り一致を見ない。

『思露』第十段　文例（3）m	『詞花懸露集』第十二段　文例（2）f
一、女のかへしをしたるにかさねてやる文 たのみがたう候し風のたよりに、ちりくる御ことの葉、みたらしの神も御しるべとをき所なう身にあまり候て、いまは人たがへなどはおぼしめし候はじとうれしきにも、ぬれまさり候袖のけしきは御をしはかりだに候へ、まつに命もせむなく候てさながらにて候。 うたあらばかくべし。 狭衣大将　しにかへり待つにいのちぞたえぬべき 中〳〵なに、たのみそめけん	返し たのみがたふさふらふ風の心のうしろめたさにちりくる御ことのは、、数ならぬわが身のうへとはさだめがたふ候ながら、こゝろのひかれ候をたよりにしてこのひと筆にとりむかひ候へば、さわらびのたねとなり候とも、とこの山なる御事にて候へ。 風の心のうしろめたさ、つねによむ事にや、わらひ草又草の名にあり、とこの山は延喜の御門あふみのうねめにたぶ哥、 犬がみのとこの山なるいさや川いさとこたへよ我なもらすな

例として右に『思露』第十段と『詞花懸露集』第十二段を挙げた。冒頭から暫くは『思露』を下敷きとしたことが認められるものの、途中から全く違う文章になっている。何より『思露』では男の文なのに、『詞花懸露集』では女の返しで、男女が入れ替わってしまっているのである。またこれを艶書として比較した時にも、『詞花懸露集』の方が時代的に降るものであることは認めざるを得ないようである。なお『思露』にも文中の詞についてまま引歌の注記があるが、『詞花懸露集』ではよりそれが多くなり、さらに注解的な文章が添えられる。

これ以外では『思露』第八段の女の文が『詞花懸露集』第十一段の女の文と、同じく第十三段の男の文が第十四段の男の文とが関係があることを認め得る程度で、それらもかなり崩れた形となっており、『思露』とは相当に隔たっているといわなければならない。

書様については『思露』を唯一のソースとしていたのに対し、文例の場合はかような差異が生じているのが不思議

である。すなわち『詞花懸露集』の編者は、既に『思露』にいくつも格好の文例が載せられているにもかかわらず、基本的にはそれを利用せず新たな文例を創作しようとした訳である。艶書文例集というものは読者の技癢を刺激するものであり、次章で述べる『堀河院艶書合』がそうであるように、諸本間で文例に出入りがあることも珍しくない。こういう意識が艶書文学を発展させる原動力となったのであろうと推測される。

四、艶書文例集の成立と改編（2）―『堀河院艶書合』

『思露』はまた『堀河院艶書合』の本文の成立とも無関係ではなさそうである。

『堀河院艶書合』は、康和四年（一一〇二）閏五月、殿上の侍臣と女房歌人との間での二度にわたる贈答歌をまとめたものであり、[13] 恐らく遊戯的な雰囲気の一過性の催しであったはずが、「わが国書簡体小説の源流となつた」[14]といわれるように、後代にも和歌史にとどまらない広範な影響を及ぼし、通常の歌会一座とは少しく異なる関心で読まれてきた。全ての伝本に歌会とは関係のない、作者・成立年時とも未詳の艶書文例を併せ持っていることでそのことは証明される。群書類従本のように歌会一座だけの本もあるが、後人が文例を除去したに過ぎない。これを『思露』の艶書文例と比較すると、漢語や仏教語をまじえて構成されているものが目に付くが、やはり基本的には古歌や源氏・狭衣・伊勢など物語の詞によって創作されていて、室町期の艶書文学としての質的な差異は感じられない。次頁でその標題を一覧する。大別すれば伝本は文例10までのものと、文例11を持つものとに二分される。文例の構成に着目すれば1～3、4～6、7～10が、それぞれ恋の一連の過程を形成しており、11は後人の増補と目されるが、これは『思露』第十六段「及ばぬ枝に心をかけたる文」と一致するのである。細部の崩れはあるが、まず『思露』から取り入れら

『堀河院艶書合』附載艶書文例一覧

(1)	「男初めて女のもとへやるべき躰」	m f
(2)	「男文の数をつくせども女うけひかねばうらむる躰」	m f
(3)	「男後朝の文の躰」	m f
(4)	「初めて女のもとへやるべき文の躰」	m f
(5)	「文の数をつくせども女うけひかねばうらむる躰」	m f
(6)	「後朝の文の躰」	m f
(7)	「初めて男のもとより」	m
(8)	「初めて女のもとにやる躰・春」	m f
(9)	「後朝・夏」	m f
(10)	「たえてとはぬ男のもとへ女の遣る躰・秋」	f m
(11)	「位高き人に心の色をあらはすべき躰」	m

れたものとしてよく、『堀河院艶書合』の一部の伝本は、伝来の過程で『思露』と接触していることが明らかになる。いま、宮内庁書陵部蔵〔室町後期〕写本（一五五・五九）によって左に掲げた。

さて『堀河院艶書合』の諸本のうち、最古のものは宮内庁書陵部蔵嘉吉二年（一四四二）写本である。従って艶書文例もこれ以前の成立・附加ということになる。このほかにも室町期の古写本が比較的多く残存する。この時期に流布していった状況が掴めるが、早く

『思露』第十六段　文例（9）

一、をよばぬ枝に心をかけたる文

（中略）

我ながらおほけなうあさましきことを申しいだし候はんも、世のきゝみゝうしろめたう、のちくやしう候て、あなかしこ、とこの山なる事にて候へよ、おらぬなげきも中〳〵思ひたへたるやうに候ながら、たゞまくらのみこそと人しれず候。涙のはても命をかぎりにてやとせんなう候。げにきもふとき物は人の心にて候ければ我身さへうとましうこそ候へ。ことのついでにはひろうも候なんや。やがて〳〵跡なき煙にて候べく候。

『堀河院艶書合』文例（11）

一、くらゐたかき人に心の色をあらはすべきてい

くやしとて、あなかしこ、とこの山なる事にて候へ。をらぬなげきも中〳〵に思ひたえたるやうに候ながら、枕のみこそ人しれぬ涙のはても、あはれをきはにてやとせんなうおぼえ候て、げにきもふときものは人のこゝろにて候けると、我ながらうとましうこそ候へ。ことのつゐでには御ひろうも候なむ。やがてあとなきけぶりにて候べし。

から本文には欠脱が生じていたようである。艶書文例での目立った特徴としては、文例4の標題「初めて女のもとへやるべき文の躰」を脱するもの、これを「初めて男をんなのもとへ」とするもの、さらに文例8の女の返し全文を脱するものが多い。「初めて男をんなのもとへ」とするのは、標題が脱落した後に推定で補ったものであろう。以上を規準として諸本を分類すれば、

Ⅰ　欠脱のないもの
Ⅱ　文例4の標題を欠くもの
Ⅲ　文例4の標題を「初めて男をんなのもとへ」とするもの
Ⅳ　文例4の標題と文例8の女の返しをともに欠くもの
Ⅴ　文例4の標題を「初めて男をんなのもとへ」とし文例8の女の返しを欠くもの

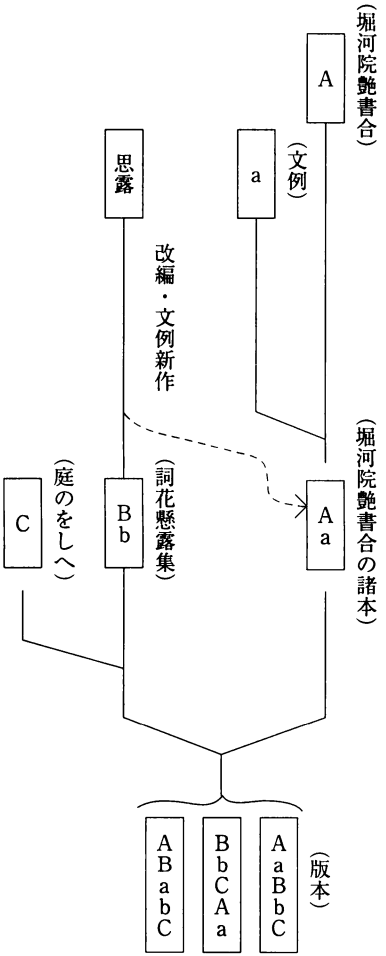
の五類となり、諸本の分立はほぼ右の順を辿ったものであろう。[15] さて問題の文例11を持つものはⅡⅢⅤのうちに見出され、『堀河院艶書合』諸本形成の過程で比較的早く『思露』からの増補がなされて流布したことになろう。『詞花懸露集』『庭のをしへ』と取り合わされた写刊本は、末流のⅤに属して文例11を有する。

ところで文例11を持たない、すなわち『思露』とは接触していない、Ⅳに属するスウェーデン王立図書館蔵〔室町後期〕写本が「思露」という外題を持っていることは注目される。つまり室町後期には『堀河院艶書合』を『思露』と号していた事実がある訳で、このことは艶書文例集の成立を考える時に大変興味深いことである。

「おもひのつゆ」という詞は、和歌の用例に見た通り、人間の感情の発露と解せば事足り、歌語としてさして奇異

なものとは思えない。ただ中世にあっては、この詞はおそらく共示義として艶書や艶書歌といった艶書文学全般を意味したのではなかったかと想像されてくる。[16] つまり艶書文例を持つからこそスウェーデン王立図書館蔵本は『思露』と称されたのであろう。

これらのことによって、『堀河院艶書合』の艶書文例が一体いつ頃誰の手によって附加されたかを考えるための手がかりを与えられる。ところで『思露』の跋文は「むかし堀川の御門艶書合など侍りしにも、あまりにむかしごとなれば、中〳〵事のなさけもさだかならぬにや」と述べている。良基は『堀河院艶書合』を先蹤としつつも、和歌のやりとりだけの構成を、具体性に欠いて、いささかあきたらないものと思っていたのである。ここに堀河天皇の歌会とは何の関係も持たない艶書文例が附加される事情もほのみえてくる。『堀河院艶書合』の現存伝本では歌会本文や作者表記もまた相当に乱れていて、[17] 康和四年当時の本文を伝えているとは一寸考えられないようである。そうすると



『堀河院艶書合』の歌会本文も、中世に入って後に艶書文学に深い関心を寄せる人物のもとで、現在見るような形に整えられていった可能性を考慮に入れるべきである。もとより艶書文例はそのような人物の創作にかかるものであり、さしあたってはそこに二条良基が係わっていた可能性を探ってみてよいであろう。

以上、複雑な考証を続けてきたが、最後に『思露』と『堀河院艶書合』および『詞花懸露集』との関係を前頁の概念図に示しておいた。『思露』は結局忘れ去られ、後人の改編本である『詞花懸露集』が用いられることになったが、中世の艶書文例集の形成の上で極めて重要な役割を果たしたテキストであった。

改めてことわるまでもなく、本書は仮名文の執筆ということを考える上で様々な示唆を与えてくれるものであり、汲み取れるものはまだまだ多いと思われる。多方面における活用が待たれる。

〔注〕

(1) 引用は天正本を底本とした新編日本古典文学全集による。神宮徴古館本では「紅葉重の薄様の執る手も薫るばかり焦がれたるに詞を尽くしてぞ聞こえける」となっている。流布本も同じ。天正本が艶書のしきたりを知って誇張したもの。

(2) 引用は宮内庁書陵部蔵〔江戸中期〕写本（二〇六・八〇五、外題「今川了俊書札抄」）による。

(3) 艶書文学としての『詞花懸露集』を考察した主な論攷には、市古貞次氏「艶書小説の考察」（『中世小説とその周辺』東京大学出版会　昭56・1、初出は昭12・1）、暉峻康隆氏「日本の書翰体小説」（『近世文学の展望』明治書院　昭28・1。初出は昭18・8）、今井源衛氏「女子教訓書および艶書文学と源氏物語」（『紫林照径』角川書店　昭54・11、初出は昭49・9）、湯浅佳子氏「近世艶書文学における『詞花懸露集』」（二松6　平4・3）、辻勝美氏「中世女流日記文学と手紙」（語文92　平7・6）などがある。

(4) 以下いくつか例示する。

薄野のをばながもとにしをれても思ひの露ぞ置き所なき（土御門院集・四二三・寄野恋）

人ごとのこひの千草も数数におのが思ひの露やかはらん（夫木和歌抄・十三・秋四・五四九一　九条基家）

さそはれていとど思ひの露ぞもる風のかけたる袖のしがらみ（草根集・七七一六・寄風恋）
身は老いぬなにの思ひの露にてもかからじとすれば秋の夕暮（宗祇集・一〇三・秋夕感思）
あふまでと思ひの露のきえかへり（水無瀬三吟・四五　宗祇）
思ひの露をかけしくやしさ（湯山三吟・一八　宗祇）

（5）良基の仮名日記『小島のすさみ』には、

殿上の御遊などにはあらで、目馴れぬ戎衣の上人どもの気色、もののふめきたれど、おのおの思ひの露をよすがにて、なほこと葉の花を争ふなるべし。

と「思ひの露」をやはり『新古今集』序により用いている。また『都のつと』跋文でも「名ある野山の末には、思ひの露を残し置き、情け多き草木の蔭には、ことの葉をかきあつめて、姉歯の松にはあらねども、都のつとと名付け侍りぬ」と記している。

（6）なお、『思露』とその作者について、足利義満の命により成ったという武家故実書『三議一統大双紙』筆法門第十一（群書類従巻六百八十一による）に、

心はづかしき女房の被仰しは、けさう文の詞に、おもひよるべきものは源氏物語なり。摂政殿の御家のやうに、おもひの露と云ふ物を、けさう文など、てあそばしたるも、如何とおぼゆることもまじわりて見ゆるなり。

とあるのは注目される。「摂政家」は良基であり、艶書文例集としての『思露』を批判しているようである。しかし偽書説もあるように、『三議一統大双紙』の成立は義満の時とはとても考えられず（ここもむしろ『今川了俊書札礼』をもとに書かれたとも憶測される）、参考とするのにとどめたい。

（7）南北朝・室町期の「上臈」「上臈局」とは、良基の『女房の官しなの事』が「これらなどは大臣・大中納言の娘、可然人々の娘まゐる」（禁裏上臈のつぼね・一位二位のつぼね）などと解説するように、内裏や仙洞に仕えた摂関家・大臣家出身で天皇・上皇の配偶に准ずる女房である。厳子は後円融天皇の即位とともに宮仕えに上がり、永和三年（一三七七）にのちの後小松天皇を産むが、女御や中宮となることはなく、後円融譲位後も依然「上臈」のまま、永徳三年（一三八三）十一月二十七日に従二位に叙され、応永三年（一三九六）七月二十四日に至って院号宣下された。吉野芳恵氏「室町時代の禁裏の上臈―三条冬子の生涯と職の相伝性について」（國學院雑誌85―2　昭59・2）、桑山浩然氏「三条公忠女厳子の後宮生活」（女性史学11　平13・7）参照。

(8) この消息文と折り枝の相関についての研究は坪井暢子氏「源氏物語の消息文に関する一考察」(人間文化研究年報15　平4・3) など数多い。

(9) 佐藤恒雄氏「歌学と庭訓と歌論—為家歌論考」(『歌論の展開』和歌文学論集7　風間書房　平7・3) 参照。

(10) 注3前掲論攷。

(11) 注3前掲論攷。

(12) 『増鏡』(尊経閣文庫蔵後崇光院筆本)「おりゐる雲」巻に、康元元年 (一二五六)、後深草天皇に中宮藤原公子が入内した露顕の儀として、

十二月(ママ)十七日、豊の明の頃なれば、うちわたりはなやかなるに、いとゞうちそへていまめかしうめでたし。その日御消息をきこえ給ふ。

ゆふぐれをまつぞ久しき千年までかはらぬ色のけふのためしを

関白かゝせ給ひけり。紅のにほひの薄もなき、八重にかさねたるを、むすびてつゝまれたり。

とある。関白は鷹司兼平である。同じく「さしぐし」巻でも、正応元年 (一二八八) に伏見天皇の中宮藤原鐘子への後朝文として、

そのくれつかた頭中将為兼朝臣、御消息もてまいれり。内のうへ、みづからあそばしけり。

雲のうへに千代をめぐらむはじめとてけふの日影もかくや久しき

紅の薄様、おなじ薄様にぞつゝまれたんめる。関白殿「つゝむやうしらず」とかやのたまひけるとて、花山院に心えたるときかせ給ひければ、つかはして包ませられけるとぞ。

とある。関白は二条師忠である。ここで後朝文の包み方を知らない師忠は、執柄たる資格がないと暗に難ぜられているのである。なお『為兼卿記』嘉元元年 (一三〇三) 九月二十三日条に、後二条天皇中宮藤原忻子への後朝文を、関白二条兼基 (勅撰歌人でさえなかった) が清書して遣わす件について西園寺公衡と談じた記事があり、

予心中存、此哥ハ可有口伝事也、乍恋哥聊可有思慮歟、このくれをまつ心にも松をそへ、ちとせをすくす心ちして候へともすこし可存故実、内裏、和哥事殊有御沙汰歟、執柄、哥無其沙汰、被詠進之条、不審之由申談畢、

とある。関白が (歌道に長じているかは別として) 代作するものであったことが分る。

(13) 『平安朝歌合大成』第五巻 (同朋社　昭32・1) 二四四・康和四年閏五月二日・同七日　内裏艶書歌合「本文研究」参照。

(14) 注3前掲暉峻氏論攷。

(15) 諸伝本中で文例11を有するものには、Ⅱに属する島根大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写本（九一一・一四八・Y七三）、Ⅲに属する宮内庁書陵部蔵〔室町後期〕写本（一五五・五九）、慶應義塾大学図書館蔵〔江戸末期〕写本（一四六・七・一）、高山郷土館蔵〔江戸後期〕写本（四四）、そしてVの版本（『詞花懸露集』『庭のをしへ』と合綴）、宮内庁書陵部蔵〔江戸中期〕写本（二〇六・七三七）などがある。

(16) なお『中務内侍日記』に、正応元年（一二八八）のこととして「七月七日、院の御所より、露の御草子とて面々に給へりて歌詠み侍るに」とあり、女房たちに「露の御草子」を賜って和歌を詠むよう命ぜられたことが見える。「露の御草子」とはどのようなものか分からないが、この時女房たちは七夕の二星の思いを題としてある程度の歌数を詠んだ訳であるから、そういう艶書ないし艶書歌を収載する草子か。

(17) 注13前掲萩谷氏編著による。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

東山御文庫蔵『思露』　１オ・ウ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

同　17オ・ウ

附録　東山御文庫蔵『思露』翻刻

〔凡例〕

一、『思露』の本文全文を翻刻した。翻刻はなるべく底本の面影を遺すように努め、仮名遣・送り仮名・宛字・漢文表記・ルビなどもそのままとしたが、適宜改行した箇所がある。

一、底本の丁替わりは」で示し、本文の下に(18オ)の如く示した。

一、底本の漢字の旧字体は通行の字体に改めたが、一部の異体字は生かしたものもある。

一、底本の虫損箇所は□で示し、推定し得る場合は〔　〕で傍注した。

一、脚注には各段の内容を標題として示し、また本文の原態、不審ある点を中心に記した。

〔附記〕

本稿は和歌文学会例会（平成十四年七月十三日、於駒澤大学）での口頭発表に基づく。末筆ながら、底本の翻刻掲載の御許可を賜った宮内庁侍従職に篤く御礼申し上げます。

おとこ女のふみのかきやう、

一、女御更衣のうるはしき御ふみ、入内のその日、まつかならす文をつかはさる、なり、その御ふみのやうは、くすりつ、みとて、うつくしきうす様（くれなゐむらさきのにほひ）なとょ（なるへし）一かさねにた、哥（いはゐの心なるへし）一首をかきてこと葉なく、その上をまたかさなりたるうすやうにてつ、みて、ゑほうにをし折てくすりのやうにかみしもをおし入て、葉つ、むやうに両方をおしいる、也（柳営にすゆるなり、たゝしはこは内へとり入れす、）たゝの人のむことりにもはれのやうは、むかしはかやうなるへし、これはしこくのはれ」のことなれは、よ(1オ)のつねにあるへからす、

一、むかし女房ふみは、かさなりたるうすやうにかきて、そのうへをまたかさなりたるうす様にてたてふむなり、いまの引合なとのたてふみ同こと也、源氏にもすくよかなるたてふみなとかきたるもこれなり、物の枝にもつくへし、又みちのくにかみといふは、いまの引あはせなり、

一、よのつねのけしやうふみは、うつくしきうすやうに（くれなゐ、紅梅、やなき、ふち、色〳〵時の花によるへし、こほりかさね、むらさきは、いみのあるやうに源氏にもかきたれとくるしからす、）かきて、うつくしうまろくむすひて（まろ〳〵とむすふなり、はかきはさたかならす、又行といふもしのやうにひろく」すみをひくと申なり、）物の枝につくへし（枝のたけはちいさくあるへし、しのふ文はちいさきしのふ草となるへし、）花の色〳〵は、春は(1ウ)梅、さくら、やま吹、藤、夏は四月まつりの日の葵、五月五日のあやめ草、なて

第一段　女御入内の後朝文の包み方故実

第二段　艶書の料紙

第三段　艶書の意匠と折枝

しこ、さらぬなさけある草の花、秋は荻、はき、菊、紅葉の枝、冬は五葉松の枝、雪おれの竹、霜かれのかしけたるさゝ源氏にあり又なにゝてもあれ、こゝろある人のむらさきのうすやうにやかてむらさきといふ草のみのなりたるにつけたる事の侍なり、わか紫の心にて返〳〵やさしくみ侍しなり、かやうの人のさいかくにてあるへし、源氏にかたのゝ少将は帋の色をとゝのふるとかき」たるは、むらさきのか(2オ)みにはやかて藤なとの枝、くれなゐの帋には梅の枝なと、おなしさまの色の花につくるなり、これは一説とみえたり、さりなからまたあらぬ色につけたるも、はへあひてよし、源氏にもあらぬ色につけたる事おほし、いつれも〳〵しさゐなき事なり、

一、おとこのしのひふみは、あなかしこ〳〵、おちて人のみるとも、たかもとへとも、又たか文ともみえぬやうにかくへし、手をも日ころにはかきかふるなり、源氏に六条院の柏木の右衛門督のふみを見つけてあた」ら人のふみかきこそとい(2ウ)はれたるも、そのひとの文とみえたるをなむせられたるなり、返〳〵おもしろ〇き ことにや、

一、源氏のは、木ゝのまきのしなさためにに、心つきなきおりふし、こま〳〵とあるふみを人のもとへやるましきやうをかきたり、春のはしめおほやけことのしけ

第四段　男の艶書は匿名を保つべきこと

第五段　艶書の書様と源氏物語、歌学の知識

からむ比なと、いとしもなき文に哥なとかきそへたらんは、返〳〵心つきなかるへし、春の日ののとやかなる雨のうち、秋の夕への物かなしきおりふしなと、こまやかなるふみの」なさけふかゝ覧はいと見所あるへきわさにや、女のかたより(3オ)こま〳〵とふみをかくことはことにあるまし、誠心さしあらむ人の、しのひて月日つもり、又もしはあるましきやうなる忍ことたとへは藤つほ、おほろ月夜、うき舟やうのことなるへし、なとのなさけをみせんとて、女のかたよりこま〳〵とあらむもおもしろかるへきことにや、いとしもおもはれさらむ女の、こまか文哥かちならむも、かたはらいたかるへし、又源氏さ衣の心はやさしきことと心えて、はしめたる後朝の文なとに、きりつほの更衣のこと葉、夕」かほのうへの事、うきふね、又さころも、あすかゐやうの(3ウ)こゝろをかきたらむは、いと〳〵いむ事にて心なき事にてあるへし、それものち〳〵はくるしからす、はしめ後朝なとのいはゐの事なり、返〳〵そのとりたる本哥本説のいわゐの心をかくへきなり、のち〳〵はいか程もしみかへり、もみ〳〵とあらむ哥のこと葉をとるへし、おほ方艶書のかきやうは、たゝやうもなく、しみ〳〵の(もみく)と、うちきゝのおもしろく、さめきたるかよきなり、哥も連哥もこと葉の一にてもあれ、てにをはのたかへるはいたつら物に」なる也、ふみかきも(4オ)一字もたかへは、又さらに〳〵おかしき物になるへし、はしめよりうつくしうよみつゝくれは、する〳〵とおもしろくきこゆるやうにかくへし、これも其人のむまれつきのこと葉にて侍へきにや、ならふ事はかなふましきなり、又はかむなの

文学、源氏狭衣やうのことをおほくみおほゆる人のかくへき事也、ふるき哥まくら、万葉集やうのおそろしきことも、ゑんありてとりたるはおもしろき也、けりやう、あしたの空といはんをあけくれの空なとかき、又暁といはむを有明」かた(4ウ)のなとかきたらむは、よにきゝよかるへきにや、哥のさまも短冊にはかはるへし、たゝ源氏のうた本にてあるにや、順徳院、男女の文のやう源氏かほんにてあるへしとかゝせ給、哥のさまもおもしろし、やかてまきるゝ我身ともかな、きえやしなましうきことをなと、しみ〳〵もみ〳〵とあるまゝをよむへきにや、はしめつかたはたゝ哥はかりにてひとこと葉あるへし、こまかなること葉あるましきなり、それも男のかたよりは、あひそめたらは、しみ〳〵ともかきやるへし、女のかたより」すゝみてふみやることはなけれとも、心やすからんおとこのもとへは、お(5オ)りにふれて花紅葉の枝につけても心の色をあらはさむもけふあるへきことにや、いまたあはさらむ女のふみを五六度もやりたらむに、一かう返事なからむはやかておとこもたいくつすへき事なれは、さもとおもはむ人はひとこと葉の返事はすへき事なり、又こゝろをみんとおもはゝ、文のかすつもりてかへりことせむもおもしろかるへきにや、人によりことによるへきこそ、又色をも香をもしらさらむ人」のもとへ中〳〵やさしからむ文をやり、哥なと心つきなかるへし、心やすか(5ウ)らむ人のもとへ文かきなともこゝろあるさまにかくへきにや、此比の人は、たゝうるまのしまの人おなし事なれは、御恋しくこそ候へ、いつか御わたり候へきと

かきたらむこそよかるへけれ、かやうのこと色たてん人はよく〳〵心えわくへきにこそ、源氏の大将もすゑつむのもとへは、から衣の哥なとその人にあひて返事もせられたるにや、六条の御息所、藤壷のもとへは、ことに哥もこと葉も猶さり」(6オ)なく、ことゑりをし、すみ筆をもとりとゝのへてかゝれたるは、はつかしくみえたる人にてあるへけれはなり、よく〳〵心うへき事にや、

一、文のかきやうは、よのつねの哥なとのやうにちらしかくへし、墨つきほのかなるもよし、又こすみ、うすゝみにませたるも一のていなり、源氏にもさま〳〵にかゝれたるにや、女のてはつよくすくよかならむよりは、ほけ〳〵とありたし、六条御息所は手かきなれとも、あまりにつよきやうにやとおほゆるなり、哥も上手なれとも、猶さりことを神」やたゝさむなとは、はしたなくつへ〳〵し(6ウ)くきこゆるなり、藤壷、むらさきのうへの哥のさま、ふみかき、ほけ〳〵として物あはれにもなさけふかけれは、この人〳〵本にてあるへし、

一、源氏、狭衣、さならぬふるき物かたりなと、おもしろからむこと葉いかならむも、時によりてとるへき也、ねさめ、はま松やうの物かたりも人のむかしよりもてあそふものなれは、とりたらむもよかるへし、世継にも女房つほねのかうらむに文をむすひつけたることあり、かやうのことは人に」より時によるへし、猫(7オ)

第六段　艶書の筆蹟

第七段　艶書に用いる物語の詞

のくひつな、犬のくひたまにも文なとつけたるためしあるにや、いとおもしろき事なり、

一、きくはかりにていまた見さる人のもとへ、

そらにしめゆふとや、我なからおこかましきやうにさふらへとも、思ひのみこそとためらひかねて、そこはかとなく候風のたよりのうしろめたさ、をのつからあはれとも御らむしつけらる、ことにてしるしはかりの御こと葉にかゝり候はゝ、此世ひとつならぬ思ひいてにて候へく候、よろつつゝましう」候て、道しはの露(7ウ)にまかせ候そ、

哥あらはかくへし、うはの空のことなれは、こと葉おほくはあるまし、

女のかたより返事、

うはの空にちりくる御ことの葉、いかなる風のたよりとたにわきかねて、御人たかへにてやといとうしろめたう候て、みちしはの露心をかれてこそ候へ、

哥あらはかくへし、おくに一こと葉すくなくあるへし、又なくともくるしからす、」(8オ)

一、ひとめよそなから見たる人のもとへ、

さてもこすのひまもとめ候し風のつてに夢うつゝとたにわきかたく候しに、何ゆ

第八段　艶書文例(1)

第九段　艶書文例(2)

へともなくつと身にそひ候涙にかきくれ候て、入ぬるいそのうら人もかくはかりやはとことはり過候、袖のしほたれ、いつをかきりとたにしりかたく候て、いかにむくつけくもおほしめし候はんすらむとかなしう候、なかしせきあへ候はぬ心のうちを顕はかりにて候、

女の返事、」

(8ウ)

はしめもはてもたとられ候御こと葉にいとやる方なく候て、我身のうへとはさためかたく候そ、

た、一ふてあるへし、あなたより哥あらは又返事あるへし、

一、女のかへしをしたるにかさねてやる文、

たのみかたう候し風のたよりに、ちりくる御ことの葉、みたらしの神も御しるへとをき所なう身にあまり候て、いまは人たかへなとはおほしめし候はしとうれしきにもぬれまさり候袖のけしきは御をしはかりたに候へ、まつに」命もせむなく候てさなからにて候、

(9オ)

うたあらはかくへし、

狭衣大将　しにかへり待にいのちそたえぬへき
中〳〵なに、たのみそめけん

一、はしめてあふ後朝のふみ、

第十段　艶書文例(3)

第十一段　艶書文例(4)

我さへさためかね候つる夢うつゝのまよひに今朝はいとゝかきくれ候て、夕待まの心もとなさ、やかて千世をふる心ちし候も、いつのならはしにてかとけしからぬやうにおほえ候て、あやにくなる鳥のつらさも御こゝろの末にてそと、くらふの山かひなく候、よこ雲のうらめしさわかれそ恋のとておほしめしたにいて候はしとかひなく候て、」

寂蓮　逢までのおもひはことのかすならす
わかれそ恋のはしめ成ける　(9ウ)

女のかへり事、

かきくれて候夢のまよひに思ひわくかたなう候てをのつからなからへ候はゝ身をさらぬおもひ出にても候へきに、草原はたのみかたう候て、

こと葉すくなかるへし、哥あらはかくへし、

一、たひ〳〵あふ人のもとへ、

よその月日をうらみ候しは、猶ことのかすならす候けると、中〳〵せむなうやる方なく候こゝろのうちもあはれとたにおほしめし出候はしな」一夜をたにあかし　(10オ)

かね候床のうへはかた野の里もかくはかりやはとけしからぬやうに候も、このくれをいのちにかけて候、あしわけならぬ事にて候へく候、

俊成　あふ事はかた野のさとのさゝのいほ
しのに露ちるよはの床かな

第十二段　艶書文例(5)

一、あふて後、忍て久しくあはさる人のもとへ、
いつとなう人めの関のわりなさも、たか御こゝろの末にてかとまめやかにあちきなう候て、つもりはて候ぬる枕のちりも風たにはらひかねて候、さむしろの露けさに夢路さへたへはて候ぬる物かなしさも一かたならぬ物思ひにてこそ候へ、をのつから忍しと」たにおほしめしいてられ候はゝ身のおもひてにて候へく候、こけのみたれはおなし心にて候へく候、(10ウ)

一、おとこのたのみなきに女のやるふみ、
ふし柴の御心の色は思ひしことにて候、なか〳〵やるかたなう候、おり〳〵はたゝ身そうらめしきとのみかこつかたなう候て、をのつからなけの御こと葉にたにかゝり候はねは、もえむ煙をたにあはれとはおほしめし候はしな、とりむかゐ候も、これやかきりとせきあへ候はねは、さなからにて候、

かねてより思ひしことよふし柴の
こるはかりなるなけきせんとは

くりかへし身そうらめしきあたひとに
なれすは物をおもはさらまし」(11オ)

一、心ならす遠国へなと行たる人につかはす文、
おなし世とおもひなし候たのみはかりをいのちにて、空ゆく月のかきりたになく

第十三段　艶書文例(6)

第十四段　艶書文例(7)

○なけ　傍書は衍か。「あはれをばなげのこと葉といひながら思はぬ人にかくるものかは」(古今和歌六帖・四・二一四六)による。

第十五段　艶書文例(8)

候へは、おもひたえ候なから、心のみちはいく海山もさはらぬことにて候物を、いかにおほしめしたにおはし候ぬ事にて候覧とかひなう候て、わたる舟人かちをたへて候、風のつてたに候はねは、心ほそさのみにてあかしくらし候なり、めの末はそなたの空の夕の雲のけしきにてもおほしめしいて候はゝ、いかにあらぬつらさのなくさめにて候なまし、たゝかすに□(候)ましき涙にのみ」かきくれ候て、ふ(11ウ)てのたてとも□(お)ほえ候はねは、さなからにて候、

狭衣　かちをたへいのちもたゆとしらせはや
　　涙の海にしつむふな人

一、をよはぬ枝に心をかけたる文、

源氏の藤壷のもとへの文に、かしは木のもとより女さんの宮へつかはしたる文のやうなるへし、さふらふ女房のもとへやるへし、ちきにはやらぬことなるへし、

我なからおほけなうあさましことを申いたし候はんも、世のきゝみゝうしろめたう、のちくやしう候て、あなかしこ、とこの山なる事にて候」へよ、おらぬなけ(12オ)きも中〳〵思ひたへたるやうに候なから、たゝまくらのみこそと人しれす候、涙のはても命をかきりにてやとせんなう候、けにきもふとき物は人の心にて候けると我身さへうとましうこそ候へ、ことのついてにはひろうも候なんや、やかて

第十六段　艶書文例(9)

〳〵跡なき煙にて候へく候、

古今　いぬかみの床のやまなるいさや川
いさとこたへて我名もらすな

一、文をつくへき枝にそふこと葉、

梅の枝（古今色を香をもしる人なといふこと葉、）　桜の枝　やまふきの枝（いはぬ色なる）

あふきに（同くらふの山もなつかし候て）わたる舟人かちを（さえ衣）たへくやしき物は　蝉の」ぬけから（とそ）なかぬはかり（さえ衣）　かしけたるさゝ（水）いはもる

あさかほのはなよそへてたに（御らんも候へ）　おきにすゑこす風たに（うらめしう候）　くすの葉（古今名）又かへりこん、別ちにおふる、

雪のふる日（源氏君にそまよふ）みきはのこほり　まめおとこのある人のもとへ（袖のしほたれなとかくへし）浪こゆるころとたに

あすとたのめたる人には（今日のひるまの心尽し）

（数行分空白）　」

（12ウ）

（13オ）

あるあつまおとこの、男女のふみはいかにそと尋侍しかは、むかしさいこ中将、さねかた、みちのふの朝臣なんとのかきをかれたるもの、はし〳〵をかきいたしてつかはし侍しなり、かやうの事人の思ひ〳〵なれは、とてもかくてもありぬへし、又まことしうさためをきたるふしもなきにや、むかし堀川の御門艶書あはせなと侍しにも、あまりにむかしことなれは、中〳〵事のなさけもさたかならぬにや、やかてたくものけふりとなし給へし、」

（13ウ）

第十七段　折枝の種類と付ける詞

第十八段　跋文

夢うつゝ思ひあへす候つるあけくれの空の名残おほさ、いかにおなし心ならすさふらふらんとかひなう候て、いつとなきおのゝなら柴の心つくしは、我身の」う(14オ)さにのみなしはて候に、中〳〵なるしほかまのしき、あさゆふくゆりまさり候したもえの行末もせんなきやうにてうき世にのみたゝよひ候みなれ木はたゝ袖ぬれよとの心のすゑかな、おもはすようきせにうかふみなれ木のなれても袖をぬらすへしとは、やかて〳〵たくものけふりにて候へく候、」(14ウ)

あけくれのそらはけにたか御こゝろのすゑにてかなこりなく候らむ、をのつからまたいつかはせきもりのひまゝちつけ候はむすらんとまめやかにせんなう候て、たゝ身そうらめしきと」のみ覚て候も、あはれとたにおほしめし候はしな、ゆる(15オ)しなくうきかはくちのせきもりそみなれ木よりも袖ぬらしける、ひとりのはゐいかにおそろしき御ことにて候らんとおかしく候て、」(15ウ)

このたひしほかまのしきのうたてさ、まめやかにはるけくおもひやりさふらひしにもすきて、物おもひのたねとせんなくこそ候へ、人たのめなるさとの名さへいまさらうらめしく候て、我たにさためかねてわつらひて候、さむしろのさひしさもせめておなし心にたに候はゝとおほけなくたのみたるやうにさふらふも、はかなく候から、ありのまゝに御つたへ候はゝ、御しる人のかひも候へく候、

第十九段　艶書文例(10)

以上二通は散らし書き。

みせはやな二夜ふしみの名のみして」すからにしほる袖のけしきを
はむろとのへ　(16オ)

ましておもへ二夜ふしみのさとなからとはれぬそての霜もこほりも
このやうを申され候へく候
(数行分空白)」　(16ウ)

二条前殿下御自筆也、此物語者大殿被抄出秘書、天下口談也、被書進上臈御
局、依御寵愛云々、

第二十段　本奥書と上臈の消息

此物かたり返〳〵御ありかたく候、ことさらひさうし候はんする、よく申させ給
候へく候、さりなからかやうのゑん書なとは見およひ候はゝ、かうはしくて候、
よく申され候はゝ、御うれしく候へく候、御かさのおりふし、なを〳〵御こゝろ
さしのほとも申つくしかたくて候、」
至徳二年六月廿二日　(17オ)

春の花の木の、いつれもこゝろことにさきいて候なかにも、このはなはなをこゝ
ろおくれしらて、色香もかたはらにならふ木すゑもみ候はす候ほとに、ことさら
一枝まゐらせ候、君ならてはとおほえ候はかりにて候、

第二十一段　艶書文例(11)

返事、

しる人ならぬ身にさへ、けに色かをおもひわき候木末も候はす、はつさくらさきいて候とも、うつ」ろふこゝろも候はしとなかめ入て候、やなきか枝にとかやも、(17ウ)猶こゝろあさく、なひきやすなるおもひやりにておかしく候、いかさまけさんに入てそ申候へき、

(数行分空白)」

(18オ)